宇宙生命哲学 ことはじめ

北里環境科学センター名誉顧問／宇宙生命哲学者 伊藤 俊洋

65

講演会場で宇宙を体験する

前回（3月10日号）のコラムでは、「宇宙から地球を観る」疑似体験を紹介した。今回は、相模原市橋本倫理法人会の講演会場での「宇宙」の擬似体験例を紹介する。講演会は二部構成で、全体の主題は「宇宙生命哲学の心」、第一部は「宇宙・生命・文明の起源と進化」、第二部は「人生は、素敵な地球人になる終わりのない練習である」とした。アンケートと質問用紙に多くの方から貴重な意見や質問をお寄せ頂き、その後の「懇親会」でも質問が絶えなかった。

講演会場のステージ背面を黒幕にして照明を消し、蛍光塗料を塗った青い地球とオレンジ色の月を、宇宙空間の位置関係を縮小して配置し、ブラックライトで照らすと、「宇宙」の擬似体験ができると考えた。

一方、現在のプラネタリウムの状況も把握しておく必要を感じた。折よく、相模原市立博物館のプラネタリウムで、春の新しい企画が予定されていることを直前に知った。相模原市在住の女性邦楽グループ「あさきゆめみし」（尺八・金子朋沐枝、箏・坪井智子、十七絃・設楽聡子）による〝春宵ほしぞらコンサート〟である。桜吹雪の中を、桜づくしの春の楽曲がライブの臨場感を伴って流れた。春の星座の解説コーナーもあった。私が最も注目した地球と月は、予想通り、圧倒的な存在感で映し出され、それが観客に向かって覆いかぶさるように迫ってきた。プラネタリウムでは、これ以上の映像は期待できないと思わせる完璧な演出であった。しかし、それは、私が見たかった映像とは異なっており、講演会場ではプラネタリウムとは一味違った宇宙空間を作れるに違いないという自信が湧いてきた。

金子朋沐枝さんの尺八伴奏で歌の練習をする筆者

講演会の最後には、「生命の循環」を意味する楽曲「千の風になって」を歌う予定であった。金子朋沐枝さんのCDに「千の風になって」があったので、急遽、5日後の講演会で、尺八で伴奏して戴きたいとお願いし、快諾を頂いた。

講演会の本番では、「宇宙」の擬似体験に対し予想以上の反響があった。物音ひとつしない漆黒の闇の中で、はるかに青く輝く地球を眺めながら瞑想する時間を、多めにすれば良かったと思っている。この演示実験は、まだ生まれたばかりで、発展途上にある。多くの方のご協力により、新しい文化、宇宙アートへと発展することを願うものである。